

英語説明文読解のストラテジーとしての 語彙的結束性の活用

須部 宗生・山下 巖

1. はじめに

わが国の英語教育は、大局的に見て文法理解に力点を置いた訳読を中心として行われてきた。このような教育方法は、英米文化の導入および吸収が国家の重要な目的であった過去の日本には言語政策上必然的なものであったといえる。しかしその後日本は経済、文化あらゆる面において大きく発展し国際的に見ても世界をリードするべき地位を確立したといっても過言ではないにもかかわらず、英語の授業では相変わらず文法訳読を中心とした手法がかなりの部分を占めている。しかし過去の英語教育方法が現在の日本の国情に合わなくなっているのではなかろうか。日本が外国に向けて情報を発信して行かなければならない現状では英語の運用能力を高めてゆく新しい教授法の導入が急務となってきた。

今年3月に文部科学省から出された『「英語が使える日本人」の育成のための行動計画』では、「卒業したら仕事で英語が使える」ことが大学卒業程度の英語力の具体的な目標として挙げられている。また、同計画は従来の「文法訳読中心の指導や教員の一方的な授業ではなく、英語をコミュニケーションの手段として使用する活動を積み重ね、これを通して、語彙や文法などの習熟を図り、「聞く」「話す」「読む」「書く」のコミュニケーション能力の育成を図っていく指導の工夫が必要である」と教員に対しても警鐘を鳴らしている。もし大学における英文読解の授業方法が、旧態然とした購読法を踏襲し、いまだに文法訳読から脱却しきれないままであるのならば、単なる文法的知識を手掛かりに読み進むボトムアップ型処理 (bottom-up processing) に多

くを依存することになり、Alderson と Urquhart が述べているとおり、「学習者の英文読解力向上の手助けとなるというよりはむしろ、母語（日本語）への置き換え作業をますます助長しその域を脱しきれない学習者と教授者を生み出している」¹⁾といっても過言ではない。大半が日本語で進行してゆく文法訳読式の授業形態は、学習者が英語そのものに触れる機会が少なく、母語からの干渉 (interference) を受けやすくなる。したがって「話す」「書く」などの発信型の英語運用力 (productive skills) との連携が希薄で、現代にそぐわないものといわざるを得ない。

さらに、英語力を国際的基準で測る試験といえる TOEFL (Test of English as a Foreign Language) の日本人受験者の平均得点は1998年7月から1999年6月の1年間でみると501点で、アジア21か国中18位であった。東アジアの他の国々と比べてかなり進んだ教育水準にあると見られた日本は、実用的英語教育においてかなり遅れを取っているということ認めざるを得ない。

本稿では、英語読解テキストの英文に現れる語彙的結束性 (lexical cohesion) に注目し、それを活用した教授者が英語を使いやすい授業プランの作成法を提案する。これにより学習者に対しより多くの英語によるインプット (input) が可能となり、テキストの背景知識 (background knowledge) を利用したトップダウン型処理 (top-down processing) に基づく読解ストラテジーの指導が行われ、文法訳読式は最小限に留めることができるのである。

¹⁾ Alderson, J.C. and A. Urquhart (1984) Reading in a Foreign Language. p15

2. 2つのテキストタイプ

我々が、日常目にするテキストはその構造において多岐にわたってはいるが、天満の研究によると英文読解研究においては物語文 (narratives) と説明文 (expository writings) との二つに大別されて研究対象とされるのが一般的である²⁾。また、これら二つのテキストタイプの読解過程を比較した研究も盛んに行われてきており、Cote らの研究によると両者の読解過程は同じではないという研究結果が出ている³⁾。

具体的には物語文では、学習者にとってなじみのある日常的な対人関係や社会関係を扱った話題が、時間的な流れ (chronological order) や因果関係 (cause and effect) といった比較的単純なテキスト構造の類型で描かれていることが多い。したがって学習者自身が所有している先行知識 (prior knowledge) を援用することが比較的容易に行われ、テキストの非明示的意味内容を補完し知的推測を立てていくことが可能となると Goodman は述べている⁴⁾。その結果、英文読解の過程が円滑に進行しやすくなる。

これに対して、説明文の読解は、読み手である学習者の先行知識の範囲を超えていることが多く、さらにテキスト構造の類型も物語文を構成する二つの型に加え、「空間配列」

(spatial relationship)、「比較・対照」(contrast and comparison)、「問題解決」(problem solution)、「一般から特殊」(general to specific) など多岐にわたり複雑化している。したがって学習者は自身に内在する背景的知識つまり社会的スキーマ (social schema) へのアクセスが困難となりトップダウン型処理が困難となりやすい。そこで、もっぱらボトムアップ型処理への依存度が高くなり、その

結果安易な文法訳読方式の授業と結びついてしまうのである。

この二つのテキストタイプのうち、本稿では学習者を大学生と想定し、後者の説明文の読解に焦点を当て具体的にどのようにしたら理想的なトップダウン型の授業が可能かその効果的な指導法を探っていきたい。

3. テキスト構造と語彙的結束性

これまでの言語理論は文 (sentence) を分析対象の最大単位としてきた。しかし、言語の全体像に迫るためには文を越えた (supra-sentential) 視点から眺めたテキスト (text) をも対象にする必要がある。文が単なる単語の羅列ではないのと同様に、テキストも複数の文が単に積み重なっているわけではない。文を文たらしめている規則を統語法 (syntax) と呼ぶのであれば、文の集合体をテキストたらしめている原理は一体何であろうか。テキストの構造を分析するには、文を分析単位とする文文法の範疇とは異なり、談話分析 (discourse analysis) の視点に基づいたマクロ的な分析の範疇を設定する必要がある。このような分析での最大の課題は文と文のつながりをどのように説明するかにある。そこでこのつながり方の説明に用いられるのが結束性 (cohesion) と一貫性 (coherence) という考え方である。以下、これらの概念について詳しくみていきたい。

3.1 結束性 (cohesion) と一貫性 (coherence)

説明文は複数のパラグラフから構成され、それらのパラグラフを思考の最小単位とし、それらを積み重ねるように展開することで文章全体としてのメッセージを構築していく。さらに各々のパラグラフには一つの主題があり、さらにそれらの主題が前項で述べたような意味的連関性を伴って互いに結び付き合いマクロとしてのパラグラフを単位とするテキストを構成していく。逆に、パラグラフも各々の主題を持った文を単位とする内部構成単位に分解され、それらの文の主題 (sentence topic) は意味上のつながりを形成し、パラグラフの主題を作っていく。

²⁾ 津田塾大学言語文化研究所読解グループ(編) (2002)『英文読解のプロセスと指導』大修館書店、pp.125-136

³⁾ Cote et al (1998) Students making sense of informational text: Relation between processing and representation. *Discourse Process*, 25, 1-53

⁴⁾ Goodman, K.S. (1967) "Reading: A psycholinguistic guessing game," *Journal of Reading Specialist*, 6. pp.126-135

このようにテキストは、単語や文の単なる機械的な羅列ではなく、なんらかの目的のために組織化されており、この特徴は説明文の場合においてより顕著である。前項でみたように単語の集まりをある意味を持った文としている規則をいわゆる統語法とするならば、文の集合体を単なる文の集まりではなく意味を持ったテキストとしている指標を結束性 (cohesion) と一貫性 (coherence) と呼んでいる。これら両者は互いに密接な関係にあり、結束性はテキスト上に具体化されて現れるが、一貫性は結束性を手がかりに読者が構築していくものと考えられる。次に結束性について更に詳しくその特徴について触れることにする。

3.2 結束性

結束性に関しては Halliday と Hasan の研究に詳しく述べられている⁵⁾。それによると、テキストの結束性には文法的結束性 (grammatical cohesion) と語彙的結束性 (lexical cohesion) に分かれ、更にそれぞれの結束性を保証するものが以下の結束装置 (cohesive device) として細かく分類されている。

文法的結束性 (1)指示 (reference)
(2)代用 (substitution)
(3)省略 (ellipsis)
(4)接続 (conjunction)

語彙的結束性 (1)繰り返し (reiteration)
(a)上位語 (superordinate)
(b)同一語 (same item)
(c)一般語 (general item)
(d)同義語 (synonym)
(2)関連語 (collocation)

以下、これらの分類について具体的な例を挙げながら説明を加えていきたい。

3.2.1 指示

指示は it, she, they, him, us, your などの代名詞 (pronouns) や this, that, these, those 指示語 (demonstratives)、定冠詞 (definite article) などにより、文と文との間に意味的連関を持たせるものである。次の例を見てみよう。

ex. Charles stood at the bar in the village inn and he was laughing delightedly at the funny stories the night-stranded drummers were telling. He got out his tobacco sack with its meager jingle of silver and bought the men a drink to keep them talking.

(John Steinbeck, *East of Eden*)

上に示した文章の中の下線部をほどこした部分が指示の部分である。一例を挙げると、he was laughing の he、his tobacco の his は Charles を指す。このように既出の単語を代名詞などによって指示することにより結束性を形成するのである。

指示は he was laughing の he が Charles をさすように指示されるもの (referent) がテキストの中に見られる場合と、例文中の the bar、the village の the のようにテキスト内に指示するものを持っていない場合とに分かれる。前者をテキスト内指示 (endophoric reference) といい、後者をテキスト外指示 (exophoric reference) と呼ぶ。

テキスト内指示は更に、he was laughing の he が Charles を示すような前方指示 (anaphoric reference) と、例文の中には見られないが、“Though they are living in small houses, the Japanese are a hardworking people.” の they のようにそれ自身の後ろに指示対象が現れる後方指示 (cataphoric reference) とがある。

3.2.2 代用

代用は、下の例に示したように文字通り one が axe の、does が know の代わりをすることにより、文と文の間に結束性を持たせる

⁵⁾ Halliday M.H.K. and R. Hasan (1976) *Cohesion in English* Longman. pp. 1-39

ものである。文中のある語、語句を他の別の語で言い換えるという点で、指示に類似しているが、指示が意味に基づく関係であるのに対し、代用は文法的な性質が強い⁶⁾。

ex. My axe is too blunt. I must get a sharper one.
You think Joan already knows? —
I think everybody does.

3.2.3 省略

省略は、文脈 (context) から意味が明らかの場合に文法的な構造を省くことである。以下の例のように、二つの文の動詞が同じものであると予測される場合に重複を避けるために動詞 (ate) を省略することがある。

ex. 1 Mary ate an apple and Jane (ate) a pear.

省略には三つの型があり、上の例のように動詞を省く場合と以下に示したような名詞、

節単位の省略がある。

ex. 2 Nelly liked the green tiles; myself I preferred the blue (tiles).
(名詞の省略)

ex. 3 - Who was going to plant a row of poplars in the park?
- The Duke was (going to plant a row of poplars in the park).
(節単位の省略)

3.2.4 接続

接続は、接続詞を用いて二つの文や節の間に機能的な意味連関を持たせる方法である。接続によって表される意味はいくつかあるが、代表的なものは「すでに述べられた内容に更に情報を加える場合」、「すでに述べられた内容とは逆の情報を提示して比較対照させる場合」などがある。Halliday と Hasan は40以上もの接続詞をその機能的意味に基づいて分類しているが、McCarthy はそれを以下のように簡略化している。

Type	Sub-types	Examples
elaboration(推敲)	apposition(同格)	in other words
	clarification(明確化)	or rather
extension(拡張)	addition(追加)	and/but
	variation(異表現)	alternatively
enhancement(深化)	spatio-temporal(時空間)	there/previously
	causal-conditional (因果条件)	consequently/in that case

3.2.5 繰り返し

繰り返しは、前に出てきた語を上位語、同一語、一般語、同意語を用いて言い換えることにより結束性を持たせようとするものである。以下その4つの手段について具体例を挙げる。

(a) 上位語

-- I'm surprised you didn't have a cat nor a dog.

-- My family doesn't like pets.

この場合 pet は cat や dog の上位語と考えられる。

(b) 同一語

-- I saw Tony's brand new car.

-- He loves the car.

(c) 一般語

-- What shall I do with the knives, cups, dishes and spoon in the kitchen?

⁶⁾ Ibid., p. 89

-- Leave those things there.

一般語とは、item, object, thing, people などの漠然とした幅広い概念を表す語である⁷⁾。

(d) 同義語

-- Lovely weather today?

-- Beautiful, isn't it?

3.2.6 関連語

Halliday と Hasan の研究においては、関連語 (collocation) とは何らかの組織的關係 (systematic relationship) を有する複数の語を意味する。それらは like と hate のような反意語である場合、boy と girl、Monday と Sunday などのような性別、週の名前など同じ範疇内の語である場合を含む。また ill と doctor、doctor と hospital、king と crown のような場合も関連語となり得る。言い換えれば、単語の意味のもつ属性がある場合が関連語と考えられる。

3.3 語彙的結束性とパラグラフ構造

結束性のうち文法的結束性は意味的連関の上に成り立っているとはいえ、形式や文の構造と深く関係しており、読解過程においてはボトムアップ型処理と結びつきやすい。それに対し、語彙的結束性は、単語や語句の意味に基づいて形成される。したがって、テキストの構成単位同士のつながりを意味の面から明示する言語学的な情報の一つである。つまり、語彙的結束性は文脈情報の取得を可能にし、そこからテキスト構造を知る手がかりとして利用することができる。そのためトップダウン型処理の読解過程を促すのである。実際に、人工知能開発の分野において、自然言語処理技術の構築のために利用されてきている。また語彙結束性の強さを表す結束性の連鎖 (cohesive chain) は、テキスト中の互いに関連する単語の連鎖であり、意味上のまとまりとしての一区画 (text segment) の境界を示す指標として、また、意味解析時における文脈情報として利用されている。このように

語彙的結束性は、パラグラフの意味構造や主題の解析にとって最も有効な指標といえようと McCarthy は述べている⁸⁾。

テキストにおいて、パラグラフは局所的 (local) ではあるが前述のように意味上のまとまりを持った一区画であるといえる。小島と古郡や仲尾の「場面に基づく単語予測の研究」によると、ある一つのパラグラフの中では、同じ主題が同じ状況の下で述べられ、この組み合わせが一貫性を具現化しそのパラグラフを主題化 (topicalize) している⁹⁾。

逆に、その一貫性はパラグラフ内においてある制約を生じさせる。それは単語の出現の自由度を極めて小さくしているのである。つまり、同一パラグラフ内では、同じ主題が同じ状況で述べられることが多いため、そこに出現する単語はそのパラグラフの主題に沿って偏った分布を示さざるを得ない。必ずしも同一の単語が繰り返し使われるわけではないが、パラグラフの主題や前文と意味関連のある単語が高頻度で現れやすくなる。別の言い方をすれば、一貫性が高いテキストでは、上位語 (superordinate)、同義語 (synonym)、などが出現し語彙的結束性が高いことを示す指標となるのである。以上のように語彙的結束性あるいは語彙的束鎖 (lexical chain) は、文と文との表層的関連性を分析するツールとして重要な役割を果たし、パラグラフを構成する文と文との意味連関を明示することにより、パラグラフの主題がどのような構造を持っているかを表出するのである。

したがって、文を単位とする文文法による英文解析の指導だけでは、学習者にとって文と文の有機的なつながりやパラグラフを構成する連続した文を一つの論理的な流れの中で正確に読む手助けとはならない。それに対し語彙的結束性に注目し、パラグラフリーディングの手法に基づいた読解指導を行うこと

⁸⁾ McCarthy, M. (1990) *Discourse Analysis for Language Teachers*, CUP. pp. 64-84

⁹⁾ 小嶋秀樹・古郡廷治 (1993) 「単語の結束性にもとづいてテキストを場面に分割する試み」、『信学情報 NLC 93-7, 1993』

仲尾由雄 (1999) 「語彙的結束性に基づく話題の階層構造の認定」、『自然言語処理』 Vol. 6

⁷⁾ *Ibid.*, p. 274

は、文と文やパラグラフとパラグラフの主題どうしの意味連関を明らかにし、テキスト全体の構造の型や情報構造を把握し、その結果テキストを正確に理解するのに大いに役立つのである。

4. 語彙的結束性を用いた読解教材

従来の訳読方式ではセンテンス単位での意味認識にとどまっていたのに対し、語彙的結束性を利用したパラグラフリーディングの手法を利用すれば、学習者はパラグラフの意味構造を意識しパラグラフ単位で内容や論理構成の正確な把握をすることが可能になる。最近外国の教科書出版社を中心としてこの語彙的結束性を重視した教材が見られる。それらには語彙的結束性をつかむための質問や、それに基づいて作成されたテキストの論理構造を表すフローチャートを完成させるようなリーディングタスクが用意されていて、学習者に論理的推測の機会を与えてくれる。このようなパラグラフリーディングに習熟することにより、必要に応じてすばやくテキストの概要をつかむための方策が身につくように工夫がなされている。

以下具体的にテキストを提示しそこに見られる語彙的結束性を指摘し、それからどのようなリーディングタスクが作成できるか例示を試みたい。

テキスト例

If you saw a baby about to drink bleach, a drunk about to drive a car, or smoker about to discard a cigarette in a forest, surely you would try to stop them. You would stop them because you can imagine the probable results of their actions. The baby might poison itself. The drunk driver

might kill himself or others. The cigarette might cause a forest fire.

Now the baby does not know that bleach is poison. The drunk is unaware that his reflexes are slowed. The smoker is not thinking about the danger of forest fires. But this ignorance will not save them from the disasters they create. We must educate our children and friends, so that they do not drink poisons, or drive drunk, nor start fires. People who lack this education are not only a danger to themselves; the accidents or fires they cause endanger the entire community, and the entire country must pay for the medical bills and fire department.

(from *Danger in Daily Life* by Carl Baker, Eichosha, 2001)

上に例示されたテキストに挙げた英文は、大学の英文読解で使用される典型的なリーディングテキストから取ったものである。この中に見られる語彙的結束性に注目し、互いに意味的関連のある語や句を指摘すると、bleach-poison, smoker-cigarette-fireなどがすぐに目に付くはずである。しかし、読解授業にすぐ使えるようなタスクを作成するのに直接役に立つ結束性は、上位語とそこにまとめられる具体的な部分である。上のテキストの中からその例を示すと、actions という上位語とその言葉にまとめられる to drink bleach, to drive a car, to discard a cigarette in a forest という三つの行為 (action) である。他にも上位語として result, ignorance, disaster などの要約化 (encapsulation) が可能な語がある。このような語彙的結束性を一によって指摘してみると以下のようになる。

If you saw a baby about to drink bleach, a drunk about to drive a car, or smoker about to discard a cigarette in a forest, surely you would try to stop them. You would stop them because you can imagine the probable results of their actions. The baby might poison itself. The drunk driver might kill himself or others. The cigarette might cause a forest fire.

Now the baby does not know that bleach is poison. The drunk is unaware that his reflexes are slowed. The smoker is not thinking about the danger of forest fires. But this ignorance will not save them from the disasters they create. We must educate our children and friends, so that they do not drink poisons, or drive drunk, nor start fires. People who lack this education are not only a danger to themselves; the accidents or fires they cause endanger the entire community, and the entire country must pay for the medical bills and fire department.

すなわち、drink bleach, drove a car, discard a cigarette という行為は actions という上位語にまとめられ、さらにその actions によってもたらされる poison itself, kill himself, cause a forest fire という results を招く。そしてその results は disasters という単語で書き換えられていく。このように、語彙的結束性に注目することにより、第1パラグラフでは、actions, results といった意味的に中立な (neutral) 語を用いて現状 (situation) を述べているのに対し、第2パラグラフでは results を disaster という語に書き換えることにより問題 (problem) を提起している。これによりテキストの構成が明らかになってくる。

以上の分析の他にも 'probable - might' などのようなものもあり、上のサンプルキスト

中に現れたすべての語彙的結束性が網羅されたわけではないが、このようなテキスト分析によって得られた結束性は、リーディングタスクやワークシートを作成するための十分なデータとなるであろう。

次にリーディングタスクの作成例を示したい。分析によって得られた結束性をもとに、第1パラグラフをワークシート化すると以下のようなタスクが考えられる。

このようなテキスト中に現れた語彙的結束性の分析・指摘は、英単語と英単語の意味的連関の予測の上に成り立つものであり、そこには日本語によるテキストの理解の入り込む余地がほとんどない。このように英語を通して得られるテキスト情報をデータにして作成されるリーディングタスクは、教授者にとっては英語による授業の進行を容易にすると同

WHO	ACTIONS	→	RESULTS
a baby	To drink bleach	→	④
①	To drive a car	→	⑤
②	To ③	→	⑥

① a drunk

② a smoker

③ discard a cigarette in a forest

④ poison himself

⑤ kill himself or others

⑥ cause a forest fire

時に、学習者にとっては、テキストの和訳による理解を強いられずに済み、上のタスクの答えを探し指摘することでテキストの読解が深まり、和訳によらない理解が可能になる。

またさらに上のタスクによる英文理解を強化させるために、以下のような英語による質問も考えられる。

- 1) Who drives a car?
- 2) Write the answer for ②. You can find the word in the first part of the text.
- 3) If a baby drinks bleach, what might happen to the baby?
- 4) Do you know what 'bleach' mean?
- 5) Is it good for health or bad for health?
- 6) Why do you think it is bad for our health?
- 7) What is poison?

4)以降はタスクとは直接関係のない質問であるが、授業を円滑に進めるのに適した質問である。このような質問を間にはさむことにより教授者と学習者との間でテキストを媒介とした英語によるやりとり (interaction) の機会もより多く生じてくるのである。今まで学習者の口からは日本語しか出てこなかったが、こういうタスクを設定することにより、少なくとも英語の授業では英語で考え英語を使わなければならないと学習者に認識させることで、学習者から英語による応答を期待できるようになるはずである。

5. 終わりに

近年、自然言語処理の研究において、語彙的結束性が注目されている。特に討論を原稿化したものや小説などのようにテキスト区画が明確でない文章の境界を推定するための統計的な指標としての利用価値が特に高まっている。前述したように、テキスト上に意味連関を持った単語が高頻度で現れる箇所はテキストがある主題の下に一貫性を持っていると言えるが、逆にその頻度が低くなる箇所はある主題と主題の谷間のような場所であり、テキスト区画の境界となる可能性が高い。

1990年代に入り、テキストの局所的な一貫性の度合いを語彙的一貫性によって推定し、算出するプログラムがMorrisとHirstによって開発された¹⁰⁾。日本でもThe Lexical Chainerという同様のプログラムやLexical Cohesion Programと呼ばれる分析プログラムがすでに研究開発されており、今後はより詳細なテキスト構造の決定や、テキスト中の照応/省略の解消などの意味、文脈解析の実現が期待できる。

本稿では、その語彙的結束性を利用したテキスト分析により、パラグラフを単位としたテキストの意味構造を把握しその結果に基づいてリーディングタスクを作成・設定するといった、言わば、単なるテキストをリーディング教材へと変貌させる試みを提案した。談

¹⁰⁾ Morris, J. and G. Hirst (1991) "Lexical Cohesion Computed by Thesaural Relations as an Indicator of the Structure of Text," *Computational Linguistics*, Vol. 17

話分析は形に基づいて体系化された伝統文法と異なり、言葉の記述を意味の体系として捉えている。従来の伝統文法的視点に根をおいた文分析 (intra-sentential analysis) とタスクとしての和訳が組み合わさった文法訳読方式の授業では、学習者の意識はもっぱら言語の形と文の分析方法の解釈に集中し、テキストの意味を副次的なものへと追いやってしまう傾向にあることはいうまでもない。対照的に、語彙的結束性は単語間の意味連関に基づいた関係であり、文を超えた分析により把握できる。そのため、学習者は設定されたタスクを行う際に、テキストの意味に集中し文を超えたマクロ的な視点からテキストを眺めることができる。さらに、日本語が学習者の意識に入り込む機会が少なくなり Kaplan をはじめとする多くの研究者によって指摘されてきた英語そのものへの認知が疎かになる危険性も低くなるのである¹¹⁾。

ここ数年、大学生用の英文読解に主眼を置く総合教材の構成において大きな変化が生じている。従来、英文読解授業にテキストとして採用されていた教材は、ある作家(群)の短編集であったり、エッセイ集であったりした。しかし最近、セメスター制を採用する大学が増えてきたことで、前・後期各15回の授業実施基準回数にした、12章または13章構成のものへと変わってきている。おそらく初回は「導入」、最終回は「まとめ」として位置付けてテキストの消化回数には換算されないのがその理由であろう。この新しいタイプのテキストは、本文および練習問題からなる1章分を標準3～4頁と見積もると、13章分で39頁～52頁、その他目次などプラス5頁分を含めるとほぼ44頁～57頁相当からなるテキストとなる。さらに、各章の冒頭には本文への円滑な導入を意図した pre-reading activity を、また末尾には本文で読んだ内容理解を深め発展させるための post-reading task を配置されているものが多く、従来の単に読解素材と注釈を与えているだけのテキストとは異なり、

効果的かつ着実な読解のための教材としての工夫がしっかりと図られている。このような従来とは異なった意図で作られたテキストの持ち味を最大限に活用するためには、やはり従来の文法訳読式ではなく、pre-reading－while-reading－post-reading から成る methodological cycle とうまく合致する有効な読解ストラテジーの導入が必要となってくる。しかも和訳はまったく課されない TOEIC などの受験といった教育上の実用性を考え合わせれば、英文読解とはいえ理想的には英語で行われる授業が期待される。この傾向は今後ますます大学用英語教材の開発に浸透していくものと予測される。

引用文献

- Alderson, J.C. and A. Urquhart (1984) *Reading in a Foreign Language*, Longman
- Cote *et al.*, Freedle & Hale, etc. (1989)
- Goodman, K.S. (1967) "Reading: A psycholinguistic guessing game" *Journal of Reading Specialist*.
- Kaplan, R.B. (1966) "Cultural Thought Patterns in Inter-Cultural Education," *Language Learning*. No. 16.
- Halliday M.H.K. and R. Hasan (1976) *Cohesion in English* Longman
- McCarthy, M. (1990) *Discourse Analysis for Language Teachers*, CUP
- Morris, J. and G. Hirst (1991) "Lexical Cohesion Computed by Thesaural Relations as an Indicator of the Structure of Text," *Computational Linguistics*, Vol. 17
- 津田塾大学言語文化研究所読解グループ(編) (2002)『英文読解のプロセスと指導』 大修館書店
- 文部科学省 (2003)『「英語が使える日本人」の育成のための行動計画』
- 小嶋秀樹・古郡廷治 (1993)「単語の結束性にもとづいてテキストを場面に分割する試み」、『情報処理学会研究報告 NLC』
- 仲尾由雄 (1999)「語彙的結束性に基づく話題の階層構造の認定」、『自然言語処理』Vol. 6

¹¹⁾ Kaplan, R.B. (1966) "Cultural Thought Patterns in Inter-Cultural Education," *Language Learning*. No. 16.